

第116回 日文研フォーラム



うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？

What's the Translator Doing to Our Poems?



エドウィン A. クランストン

Edwin Augustus CRANSTON

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公開を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？

What's the Translator Doing to Our Poems ?

● 発表者 ●

エドウィン A. クランストン
Edwin Augustus CRANSTON

ハーバード大学教授

Professor, Harvard University

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies



1999年3月16日（火）

発表者紹介

エドウィン A. クランストン

Edwin Augustus CRANSTON

ハーバード大学教授

Professor of Japanese Literature, Harvard University

国際日本文化研究センター客員教授 1998-99

Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

- 1954年 アリゾナ大学卒業（英文学）
- 1963年 スタンフォード大学大学院修士号取得（日本文学）
- 1966年 スタンフォード大学大学院博士号取得（日本文学：学位論文：
「和泉式部日記：研究と翻訳」）
- 1965年 ハーバード大学で就職
- 1972年 ハーバード大学日本文学教授

主な著書・翻訳・等:

- *The Izumi Shikibu Diary: A Romance of the Heian Court*. Harvard University Press, 1969.
- *The Courtly Tradition in Japanese Art and Literature: Selections from the Hofer and Hyde Collections* (with John M. Rosenfield and Fumiko E. Cranston), Fogg Art Museum, Harvard University, 1973.
- *A Waka Anthology, Volume One: The Gem-Glistening Cup*. Stanford University Press, 1993. Awarded the U.S.-Japan Friendship Translation Prize and the Arisawa Prize.
- "Carmine-Purple: A Translation of 'Enji-Murasaki,' The First Ninety-Eight Poems of Yosano Akiko's *Midaregami*," *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, 25.1 (1991)
- "Hänsel and Gretel's Island: Five Prose Poems by Mizuno Ruriko," *Triquarterly*, fall 1994.
- "Shinkei's 1467 Dokugin Hyakuin, Translated with Commentary," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 54.2 (1994).

どうして、僕のような充分に生まれつきの言語的才能に恵まれていない人が、外国の言葉の勉強に一生を費やさなければならなかったのでしょうかと時々、いや、しょっちゅう、自分に問うのです。もっと楽な、満足感のある生き方もあった筈です。無駄な勉強で、目を悪くするだけです。

変な言い訳ですが、次のようなうたに出合うためだったでしょうか。

KKRJ I: 64 Anon.

Shirayama ni

Furu shirayuki no

Kozo no ue ni

Kotoshi mo tsumoru

Koi mo suru kana

静かに降る雪のように、うたが僕のどこかに降って来て積もる。そして、同じどこかから静かにひとながれの言葉が流れ出ます。

Over the white hills

The white snow falls, and deepens,

This year on the year

Gone by, the heaped-up longing

That buries my drifted heart.

本当に変な言い訳ですね。

若かりし頃、よく屋根の上に登って、夕やけ、月の出、星空を眺めました。たしかに、長い々々眺めました。何かことばに出しにくいことを感じていたこともたしかです。しかし、詩人にも、翻訳者にもなろうとは思いませんでした。あのころ、特に中学の頃、むしろ考古学者か古生物学者になりましたのです。高校に進んで、直ぐ科学のむずかしさを覚えて、あきらめてしまいました。でも、それは別の話です。

その時期に、二番目の兄からの影響が強くなり、文学や外国語に興味が湧き、僕も兄の勉強振りを真似しようとし始めました。碌には出来ませんでした。その結果、詩歌と翻訳の世界に引かれてしまいました。

兄が大学に進んで、一年生の時、パーシ博士の古代ローマ文学のクラスの学期末試験の答案（いわゆるブルーブック）を出す前、なにげなしにその裏に「アエネーイス」のある所①の自分が作った次の英訳を付け加えました。

Iopas lifts the golden lyre
And strikes as Atlas taught to play;
He sings the moon's far wandering fire
And toiling suns eclipsed by day.

The echoes of the trembling strings
Repeat the mystery of man,
And whence the myriad living things
And from what sire all life began;

Whence are the lightnings, whence the rain,
Arcturus and the Hyades,
The storms that burst upon the main
And hasten o'er the sullen seas;

Inquiring why the winter sun

In ocean plunges from its flight

Before the day's full length is done,

Or what delays the lingering night.

ジュエスチャーとして、非常に凝っていると、僕は感心しました。勿論、バージルの原文が韻を踏んでいませんし、韻律的に全く別のものです。実は、兄はこれを「訳」として考えていないようです。「Adaptation」(翻案)と言っています。しかし、何と言っても、生きている詩に成りえていることだけは嬉しいことです。特に僕らの高校のバージルのクラスでの下手な直訳を考えたら。

詩も作り、翻訳も作る――あの頃、兄の活動が活発でした。いろんな言語を習って、いろんな文学の詩を訳してみていました。特に僕が好きだったのは、ダンテの「地獄篇」の中の有名なパオロとフランチェスカの不倫の恋を物語る、甘くて悲しい一節でした。この場合、兄の訳はダンテのテルツアリマに忠実に従っていました。手許に有りますが、少し長いので、割愛します。^②

さて、僕も高校を出て、大学に進みました。あらゆる方面で兄の真似を続けました。フランス語を勉強して自分もとうとう一回位は詩の訳を作ってみようという気になりました。そういう気を僕に起こさせたのは、中世の詩人フランスワビ

ヨンの「絞首刑にされた人達のバラード」(Ballade des Pendus) でした。たしかに苦しみの文学に引かれていましたが、この訳が大学時代の只一つの実験でした。経験として意味があったでしょうが、先生に笑われやしないかと思って、敢えてブルーブックに出すことなく、ノートに仕舞い込んでしまいました。^③ まだ翻訳者になろうと思いませんでした。

日本との出会いはまた別の話ですが、最初の日本のうたとの出会いには、かすかに覚えていたような気がします。どこで読んだか覚えていませんが、かなり若い時に次の短歌の英訳を発見しました。

The time I went to see my sister

Whom I loved unendurably,

The winter nights

River wind was so cold that

The sanderlings were crying.

これを読んだ時受けた印象は微妙なものでした。言にくいような、心に染み入る悲しさと共に、異国風の何らかが潜んでいるように覚えました。日本のことをまだ何も分からなかった時でした。その時、偶然に、このうたを通して、和歌

の情緒に触れることが出来ました。どうして自分の姉か妹がそんなに恋しいか、
"sanderlings"は何ものか、分からなかった。しかし、第二句の "Whom I loved
unendurably" の "unendurably" には心を打つ強さと同時に、おかしいほどの珍しさを
覚えました。後から分かったことですが、この訳は紀貫之の

おもいかね妹がり行けば冬の夜の

河風さむみ千鳥なくなり (SIS IV: 224)

のアーサー・ウェーリイの直訳でした。^④ 直訳にも神秘的な美の可能性があるとい
うことを思い知らされました。

長年たつて、ようやく大学院に入って、日本文学の勉強をを始めました。今度
は和歌の原文との出会いも待っていました。日本文学の作品で、最初の、翻訳を
通してでなくて、原文から直接に強い印象を与えられたのは和泉式部の

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照らせ山の端の月 (SIS XX: 1342)

といううたでした。イメージとしても、メッセージとしても、はっきりしていて、
ことばとことば、句と句の繋ぎ合わせが簡単で、まっすぐ心にも、脳にも訴えま
した。これだったら、翻訳なんか不必要ではないでしょうか。

しかし、やはり、——これも兄の影響で——青春時代から起って来た、自分も詩を作りたいという動機も加わって、仕舞いには、すぐ理解出来るうたでも、どんなに分かりにくいうたでも、和歌の英訳が自分の宿命的な仕事であるように考えるようになりました。

古いうた、いにしえ昔の詩歌は、何であるでしょうか、特に異国のことばの。沈黙の固まりか、学問の対象か、それとも、生きた人間のうたごえか。どのような棒でその固まりを突いたら生きて来るでしょうか。歌ってもらいたいうたを聞いて、そのリズムを掴んで、そのくりかえしをダンスのパートナーとして踊って、何か適当なものが出来るかも知れません。

八雲立つ出雲八重垣

妻ごみに八重垣作るその八重垣を (K:1)

In eight-cloud-rising

Izumo an eightfold fence

To enclose my wife

An eightfold fence I build —

And, oh, that eightfold fence!

愛^うしとを寝^るしな寝てば

刈^こり薦^{こも}の乱れば乱れさ寝しな寝てば

(K:80)

That beauty so fine,

If I can bed her, just bed her,

Like sickled rushes

Let the tangle tangle then,

If I can bed her, just bed her.

こういう古代歌謡は手を出して、「どうぞ」と言ってくれる場合が多いのです。うたの命がリズムとくりかえしに存在します。古代歌謡ばかりでなく、和泉式部も与謝野晶子も好んで似たような繰り返しを使います。

長歌にも繰り返しが根本的な方法として現れています。長い詩の場合、短歌の場合と同じように、訳文が原文の句の数に合うことが理想の一つと考えられるで

しょう。やはり、詩の構造が大切です。そして、構造的なチャレンジに取り組むことが翻訳者の楽しみの一つです。「古事記」に出て来る八千矛の神と妻の須勢理毘賣の命のやりとりのうたがよい例になるでしょう。まづ、夫の八千矛が妻のせりひめの嫉妬にたえかねて、出雲をすてて、大和に行くよと威おどします。この歌謡のセリフが演じられたような印象を与えます。家出する夫が飛び立つ鳥のように、自分の姿をいろんな鳥に変えてみます。そうしているうちに、繰り返しくの句が重なって、うたになります。

K: 4

Nubatama no

Jet-berry black

Kuroki mikeshi o

Is the raiment that I take

Matsubusa ni

To adorn myself

Toriyosoi

In my full array;

5

Okitsutori

Bird of the offing

Muna miru toki

Peering down at its breast,

Hatatagi mo

Flapping its wings:

Kore wa fusawazu

These clothes do not become me —

Hetsunami
10 So ni nukiute
Sonidori no
Aoki mikeshi o
Matsubusa ni
Toriyosoi
15 Okitsutori
Muna miru toki
Hatatagi mo
Ko mo fusawazu
Hetsunami
20 So ni nukiute
Yamagata ni
Makishi
Atate tsuki
Someki ga

I cast them away,
Waves that draw down the shore.
Kingfisher green
Is the raiment that I take
To adorn myself
In my full array;
Bird of the offing
Peering down at its breast,
Flapping its wings:
These too do not become me —
I cast them away,
Waves that draw down the shore.
Indigo
Sown in mountain fields:
Pounded
Dye-plant

25	Shiru ni	Juice-stained
	Shimekoromo o	Is the garment that I take
	Matsubusa ni	To adorn myself
	Toriyosoi	In my full array;
	Okitsutori	Bird of the offing
30	Muna miru toki	Peering down at its breast,
	Hatatagi mo	Flapping its wings:
	Ko shi yoroshi	This will do quite well.
	Itoko ya no	My young darling,
	Imo no mikoto	Dear and honored lady,
35	Muratori no	When like flocking birds
	Wa ga mureinaba	I go flocking with my men,
	Hiketori no	When like a following bird
	Wa ga hikeinaba	I go following off with them,
	Nakaji to wa	Even though you say
40	Na wa iu to mo	You are not going to cry,

Yamato no

On the mountainside

Hitomoto susuki

A single stalk of plumegrass

Unakabushi

Bending its head,

Na ga nakasamaku

You will cry, and your crying

45

Asame no

Morning rain

Kiri ni tatamu zo

Will rise into a mist,

Wakakusa no

Young grass

Tsuma no mikoto

Tender and noble wife

Koto no

We have told the story:

Katarigoto mo

The words of the story

Ko o ba

Are these words.

これに、妻の須勢理毘賣が同じように、くりかえし、くりかえしの文句で答えます。夫を上手に誘惑して、その苛立ちを和ませてしま^{なご}います。踊りとして想像しますと、いくらかフラダンスのような雰囲気^{ふんいき}を醸し出したでしょうか。

K:5

Yachihoko no
Kami no mikoto ya
A ga Ōkununushi
Na koso wa
5 O ni imaseba
Uchimiru
Shima no sakizaki
Kakimiru
Iso no saki ochizu
10 Wakakusa no
Tsuma motaserame
A wa mo yo
Me ni shi areba
Na o kite
15 O wa nashi
Na o kite

Eight Thousand Spears,
O great, noble god,
My Great Master of the Land,
You are the one
Who because you are a man,
On each and every
Island cape you ride around,
Not missing a single
Stony cape you climb around,
Must have wives
Like the young grass.
But as for me,
Because I am a woman,
Other than you
I have no man,
Other than you

Tsuma wa nashi
Ayakaki no
Fuhaya ga shita ni
20 Mushibusuma
Nikoya ga shita ni
Takubusuma
Sayagu ga shita ni
Awayuki no
25 Wakayaru mune o
Takuzuno no
Shiroki tadamuki
Sodataki
Tadaki managari
30 Matamade
Tamade sashimaki
Momonaga ni

I have no husband.
Under the fluffiness
Of patterned curtains,
Under the softness
Of flossy coverlets,
Under the rustling
Of bark-cloth coverlets
This soft-snow
Bosom quick with youth,
These rope-white arms
In your bare embrace
Take in your hands,
Lie close and interlaced;
Pillowed in these arms,
These arms precious as jade,
Stretch out your thighs

Io shi nase

And rest yourself in sleep.

Toyomiki

Partake, my lord,

35 Tatematsurase

Of the bountiful fine wine!

この食べたいほど美味しいうたを英語に訳した時に、

「文^{あや}かきのふはやが下に　むし衾^{にじ}柔^{にじ}やが下に　栲^{たく}衾^{にじ}さやぐが下に」

等のようなめずらしいことばをしらべるだけでなく、口の中で嘗めて、考えて、色々とためした挙句、

Under the fluffiness

Of patterned curtains,

Under the softness

Of flossy coverlets,

Under the rustling

Of bark-cloth coverlets

になおした後、特別の快樂を感じました。これも翻訳者の喜びではないかとまで思いました。

最近、「言語の音楽を誉めて」をサブタイトルとする本が出ました。僕が和歌の翻訳に励んでいるので、日文研の栗山茂久先生がこの本を貸してくれました。（栗山さんはハーバード大学での学生時代、僕のゼミに出席したこともありましたが、日本流に呼ぶと「栗山君」になるかも知れませんが、何となく、不自然に聞こえます。とにかく御礼申し上げます。）非常に面白い本です。テーマは広い意味での翻訳論と言えるかも知れませんが、文学（特に詩歌）、外国語の勉強、言葉の遊び、コンピュータ科学、人工知能（artificial intelligence）、等々に関する所が多く、著者の意見をタップリ入れています。著者はインディアナ大学の教授で、Douglas R. Hofstadter という人です。専門は Cognitive Science（認知科学）です。本の題は *Le Ton beau de Marot* というフランス語のタイトルですが、中身は英語です。③ Clément Marot という十六世紀のフランスの詩人の「トンボー」（墓）のように聞こえますが、実は、もう一つの意味で、その「トンボー」（美しい音調）がむしろテーマに添っています。結構な掛け詞と思いますが、如何でしょうか。この本を開けて見ると、例の Clément Marot の或る一つの詩の英訳が沢山、本の所々に散らばっています。同じ詩の沢山の違った訳の可能性を探って、興味津津と行なった実験です。著者自身が作った訳ばかりでなく、知人、知らない人々に

も作ってもらって、集めています。本の読者にもその挑戦を及ぼす意図が明らかです。僕はそのチャレンジを無視するわけにはいきませんでした。問題の詩は二十八句の割合短いもので、各句は三つの音節から成り立っています。押韻形式はAABCC等で、大変簡単な詩の作り方です。その簡単さの理由は、この詩が小さい女の子におくる為に作られたことに存在します。“A une Damoysselle malade”(病めるおとめへ)という題です。詩のメッセージは「早くよくなって、起きて、おいしいものを食べて、外へ出て、遊びなさい」という、いくらか茶化すような、愛情を込めた、優しいものです。何故か、途中から、丁寧なVous調から親しみを表すTu調に変わるという特徴もあります。もし英訳に挑むのなら、初段階の試みとしても、かかる諸特徴に何とかして従わなければなりません。運よく、英語にも韻を踏む伝統があるので助かりますが、日本語だったら、韻の遊び上手な詩人でなければ、その実験が無理でしょうか：どうでしょうか。

A une Damoysselle malade To a Damsel Fallen Ill

Ma Mignonne Little one,

Je vous donne Now the sun

Le bonjour;
Le séjour
C'est prison.
Guérison
Recouvrez
Puis ouvrez
Votre porte
Et qu'on sorte
Vitement,
Car Clément
Le vous mande.
Va, friande
De ta bouche,
Qui se couche
En danger
Pour manger

Of bright day
Come your way —
Here's no fun,
Pleasure none:
Please get well,
Do not dwell
Shut indoors:
Prison towers
Are too dark.
Clement — hark! —
So commands.
Go, best friend
Of thy mouth,
Nothing loath,
Rise from bed
To be fed

Confitures;

Pantry jams:

Si tu dures

She who crams

Trop malade,

Long days' ill

Couleur fade

Bitter pill

Tu prendras,

Fades away,

Et perdras

No more gay,

L'embonpoint.

Plump and fair:

Dieu te doint

God's good care

Santé bonne,

Cure thee soon,

Ma mignonne.

Little one.

Hofstadter 教授のチャレンジへの僕の応募は、一応こういうものでした。教授の規定する押韻の正確さに問題の所もありますから、教授がどう思うか分かりませんが、大体において、こういう句の短い細長い詩に慣れているので、訳を作るのに大して苦労しませんでした。

"Le ton beau de Marot"は、結局どういうトーンでしょうか。詩の命はどこに存在するでしょうか。言葉の「意味」、詩のテキストの「ポイント」がすべてではな

いというのが Hofstadter 教授の主張の一つです。僕も同じ考えです。詩の生き方、詩の呼吸、音節の短縮・延長―又は心臓の収縮・拡張―韻の踏み方、詩の全体的構造、形、等にも、詩の生命が存在すると思います。

細長い詩と言えば、「古事記」第百の歌謡がもっとも適当な例の一つであるかも知れません。この歌謡が出て来る所は、雄略天皇についての説話の一つです。天皇に仕えるうねめ―未婚の若い美貌の女性で、国々から宮中に奉られたのが「采女^{うねめ}」といいましたが、―そういううねめの一人が天皇に大御蓋（おおみさかずき）を捧げようとした瞬間に槻^{つき}の木の葉っぱが蓋の中に落ちました。それを知らずに、うねめが蓋を捧げました。短気で有名な雄略天皇が、それをみそなはして、癩癩を起こし遊ばされて、刀^{たち}をお抜きになって、うねめの喉に刺し当てて、懲らしめようとお思い遊ばされた危機一髪の瞬間、うねめが次のうたを歌い出して、誉め言葉を木の形に並べて、天皇の御怒りをなごませて、命が助かりました。この場合はうたの形が特に大事です。

K 100

Makimuku no

In Makimuku

	Hishiro no miya wa	Hishiro the palace stands,
	Asahi no	A morning-sun
	Hideru miya	Sun-blazing palace,
5	Yūhi no	An evening-sun
	Higakeru miya	Sun-glinting palace,
	Take no ne no	A bamboo-root
	Nedaru miya	Firm-rooted palace,
	Ko no ne no	A tree-root
10	Nebau miya	Root-spreading palace,
	Yaoni yoshi	Yes, an eight-hundred
	Ikizuki no miya	Earthload mallet-pounded palace:
	Maki saku	Fine-timber-splendid
	Hi no mikado	Cypress the fair gates:
15	Niinaeya ni	At the Hall of New Tasting
	Oidateru	Standing, growing,
	Momodaru	A hundred-fold-ample

Tsuki ga e wa
 Hotsue wa
 20 Ame o oeri
 Nakatsue wa
 Azuma o oeri
 Shizue wa
 Hina o oeri
 25 Hotsue no
 E no uraba wa
 Nakatsue ni
 Ochifurabae
 Nakatsue no
 30 E no uraba wa
 Shimotsue ni
 Ochifurabae
 Shizue no

Tsuki tree whose branches,
 Whose topmost branches
 Overspread the heavens,
 Whose midmost branches
 Overspread the eastern land,
 Whose bottom branches
 Overspread the countryside;
 From the topmost branch
 The last leaf on the branch tip
 To the midmost branch
 Drops down and touches;
 From the midmost branch
 The last leaf on the branch tip
 To the bottommost branch
 Drops down and touches;
 From the bottom branch

	E no uraba wa	The last leaf on the branch tip
35	Arikinu no	Like floating oil
	Mie no ko ga	Into the moist, gem-glistening cup
	Sasageru	Raised in offering
	Mizutamauki ni	By the girl of threefold Mie
	Ukishī abura	Of the mothlike silk
40	Ochinazusai	Drops down, swirling heavily,
	Mina kōro	The liquid gurgling,
	Kōro ni	Gurgling,
	Ko shi mo	Even thus—
	Aya ni kashikoshi	Awed, I tremble with dread:
45	Takahikaru	High-shining
	Hi no miko	Child of the Sun
	Koto no	The story,
	Katarigoto mo	The words of the story

Ko o ba

Are these words.

和歌や歌謡の翻訳に取り掛る時、原文のリズムや句の数など構造的な要素に出来るだけ添うことが理想の一つと云えますけれども、構造が詩のすべてではないので、訳者の仕事がそれだけで終わるわけではありません。詩歌そのものは、原則として、言語の特別の扱い方です。そしてそれにも又独特の形容文句、修辞法的な要素―詩の部分品とでも云いましょうか―がちゃんと付いています。例えば、古い和歌や歌謡の場合、所謂「枕詞」や「序詞」がそれです。それらの種類を分析すると少しやゝこしくなりますので、今はしませんけれども、ここで指摘したいことは、訳者が枕詞等をたゞ問題と考えること自体が問題であるということです。古代歌謡や「万葉集」のうたにはこういう修辭がとても大切で、うたに豊かなイメージを与えます。昭和十五年の日本学術振興会の「万葉集」の英訳を作った訳者達がほとんどの枕詞を捨てゝしまったことを僕は非常に残念に思っています。枕詞抜きの万葉のうたの訳は訳ではないと思います。

こういう伝統的な修辭を何とかして英語に直そうとしたら、一通りだけの方法があるというわけではありません。枕詞がうたの「枕」だから、先にそれを置いて、うたの頭をそれに寝かせて、好い夢を見させるといのが根本順序です。例

えば、先に上げた「古事記」に出て来る須勢理毘賣のうたの場合に

「沫雪の若やる胸を栲綱たぐづのの白き腕たぐむき」

の「あわゆきの」と「栲綱」がそれぞれ「胸」と「白き」の枕詞で、英訳にも

This soft-snow

Bosom quick with youth,

These rope-white arms

(In your bare embrace)

として、原文と同じく句ごとに先に出来ます。翻訳のやり方として短縮で、きちんとしています。しかし、こういう風に日本文のつなぎ方や、構文の順序に従わない場合も沢山あります。柿本人麿の憧れの石見の国を出て、大和に上る二番目の長歌は同じように枕詞を書き出しにしています。

「つ・の・さ・は・ふ・石見の海の 言・さ・へ・く・韓の崎なる 海石いくりにそ

深海ふかみ松生るの……」 (MYSII: 135)

この場合に「つのさはふ」(沢山の蔓が這ふ)が「石見」の「石」にかゝり、「言さへく」(言葉が囁りのように聞こえて分からない)が外国の意味を持つ「か

ら」にかゝって、両方とも枕詞の役割を果たしています。もし、須勢理毘賣のうたの訳と同じようなやり方を使って、これら人麿の枕詞を訳するならば、

Vine-swarming

Rockland Iwami's sea,

Word-babbling

Karaland Cape...

に似たものが出来た筈ですが、人麿のこういううたを英語に書き直した時、僕はまったく別の方法を使いました。人麿が醸し出すゆらゆらとした波の寄せて来るリズムにかなうように、構文の順序を逆にして、枕詞に当たる部分を後にまわして、大分延長して、関係節又は同格節にしてしまいました。結果はこうです。

In the Sea of Iwami,

Where swarming vines crawl on the rocks,

Under the Cape of Kara,

A name for far lands strange of speech,

On the sunken reefs

Grows the seapine in the deep waters,

On the stony strand

Grows the lovely, gentle seaweed... (MYSII: 135)

順か、逆か、短縮か、延長か、どちらが効果的で、どちらが忠実的でしょうか。各場合に返事が違うかも知れません。

「忠実」とは何か。これは一番古い翻訳論ですね。何に忠実になるべきでしょうか。言葉の「意味」？ 原文の「ムード」、「トーン」、「雰囲気」？ 詩の「心」、その「生命」？ 段々ばくぜんとして来ますけれど、翻訳するものが色々有りますので、答えは簡単ではありません。翻訳の対象、翻訳の目的によるでしょう。

もう二つの例を上げましょう。これらは言葉の「意味」に関して忠実性が問題になった所です。一つは「万葉集」に出る大津の皇子の辞世のうたにあります。自殺を命じられた皇子の世を去るうたで、かなり有名です。が、翻訳しにくい枕詞を抱えています。それは、「ももづたふ」という非常に古い、伝統的なものです。「まだ百になっていないが、その途中です」というような回りくどい意味で、所名の「磐余^{いはれ}」の「イ」（五十）にかゝっています。（ちょうど「つのさはふ」が「石見」の「いは」にかゝるように）。しかし、「ももづたふ」の場合は、かゝりかたが特に「無心」（無意味）のようで、それにあまりにも「数学的」なので、翻訳から落

とした方がいゝではないかと思う理由が充分あると僕も思はないでもありません。しかし、とゞのつまりは訳してしまいました。やはり、こういう言葉のあそびは上代人の言語に対する好奇心、めずらしがる態度、いわゆる「言霊」信仰の現われで、捨てるのがあまりにも惜しいと思ったのでしょうか。結局は、この枕詞を直訳に近いようにして、括弧に入れて、イタリック体で印刷してもらいました。うたとその訳はこうです。

MYSⅢ: 314

Momozutau

On Iware pond

Iware no ike ni

(*Fifty of a hundred-fold*)

Naku kamo o

The mallards cry;

Kyō nomi mite ya

Shall I see them only today

Kumogakurinamu

And vanish into the clouds?

もう一つの例は、持統天皇が亡くなられた天武天皇を追悼する挽歌に出ます。(御存じのように、この二人の天皇は夫婦でした。)これも万葉のうたで、僕の好きな作品の一つです。パラドックス(逆説)を巧みに利用する、やゝ苦みの味が出る哀傷のうたです。しかし、最後の句が難訓で、よく意味が分からないと学者

が言っています。「面智男雲」(おもしろなくも)というのは多分何か非常にやるせない感情の表現ではないかと思われれます。「どうすることも出来ません」に近い意味を表しているかも知れません。このうたを訳した時、大分考えた末、大胆に自分の思うような最後の句を作りました。そういうやり方の理由はといえば、このすばらしいうたへの僕の責任を感じたからです。このうたがどうしても生きて行かないといけませんのです。こういう場合は、訳者が作家になるのです。自分もうたの作者にならなければならないのです。原文と訳文はこうです。

MYSII : 160

Moyuru hi mo

Even a burning flame

Torite tsutsumite

Do they not say one can take,

Fukuro ni wa

Hold it in one's hand,

Iru to iwazu ya

Bundle it to stuff a bag?

Omo shiranaku mo

But I am not so clever.

"But I am not so clever" が僕の勝手に作ったところずす。

韻律のメロディー―言葉と言葉の織り合わせ―が描かれた風景と共に創造する

魔術のような魅力や説明出来ない心の静けさを与えるうたもあり、そういううたの訳を考える時間が訳者にとって奥の奥の境地です。人麿の淡海おほみの海を眺めるうたはそういううたの一つです。

MYSⅢ: 268

Ōmi no umi

Yūnami chidori

Na ga nakeba

Kokoro mo shino ni

Inishie omo^oyu

「新古今集」にもこれに似たムードを読者に与えるうたがちよこちよこあります。例えば、西行法師の

SKKS IV: 362

Kokoro naki

Mi ni mo aware wa

Shirarekeri

Shigi tatsu sawa no

Aki no yūgure

こういううたが完全の域に達しているといってもいいと思いますので、翻訳等に躊躇すべきかも知れません。さりながら…真似が最高の誉め方だと言いますので、やってみなければなりません。

Ômi no umi

Out on Ômi Sea,

Yūnami chidori

Plovers on the evening waves —

Na ga nakeba

When I hear your cries,

Kokoro mo shino ni

Into my now helpless heart

Inishie omōyu

Come thoughts of long ago.

千鳥…とそれから嶋…人麿と西行…いにしへの夕暮れ…

Kokoro naki

The heart is nothing …

Mi ni mo aware wa

Yet to him awareness comes —

Shirarekeri

He knows it now:

Shigi tatsu sawa no

Snipe rising on a rush of wings

Aki no yūgure

In the marshland dusk of autumn.

「幽玄」とか「あはれ」とか「寂」とかいう日本独特の美観念を含むうたに比べ

たら、単なる擬声語は朝飯前の問題です。人麿の作品の中にそういううたもあります。お別れの恋歌で、すてきな擬声語を含んでいます。「さゝるさゝるしづみ」です。この「さゝるさゝる」は女性の服の裾のさゝるさゝるする音を表します。「しづみ」は、多分気分的に沈むという意味だろうと思われています。

MYS IV : 506

Tamakinu no

Midst all the turmoil—

Saisai shizumi

The ceaseless rustling of her silken skirts—

Ie no imo ni

I stood in silence;

Mono iwazu kite

My heart sank; without a word

Omoikanetsu mo

I took my grief and left.

「むずかしさ」という観念、「自由」(又は「不自由」という観念、「圧迫」「強制」という観念、これらの諸観念が絡み合つて、文学作品の翻訳者の頭の中でもつれ合っています。詩歌のあるべき様は何でしょうか。韻を踏むことが強制的でしょうか。自由詩が作りやすいでしょうか。掛け詞が和歌のわるい癖の一つでしょうか。こういう風に考えればきりがありません。決断によっては、否応なしに、違ふ意

見を撥ね返して、片方の可能性を捨て、しまうということになります。世の中に良さが色々あって、可能性がさまざまあるからこそ生き甲斐があるではありませんか。

上代人の大発見の一つは、発音が同じで、意味の違う——いわゆる同音異義語——の存在でした。昔から日本人は言葉愛するといふより、言葉に酔って来ています。言葉の遊び、言葉の文、漢字に与える自分勝手のよみかたがそのあらわれで、和製英語もそうです。こういう現象を嫌う人も沢山いるだろうと思いますが、僕にとっては、こういう遊びどころがむしろ日本人の愛すべき所の一つです。野菜の「菜」を取って、「菜良のサラダ」を作ってほしいのです。そういう文化的サラダが本当に美味しいものになりました。う。「サラダ記念碑」を立てるべきかも知れません。

同音異義語の文学的役割は何でしょうか。ある言葉の下に又はうらにもう一つの言葉が隠れて、潜んでいます。めずらしい発見が待っています。ドアマットの下に鍵が隠してあるのです。その鍵を取って、時間、空間の交差点で宇宙に穴を開け、別世界を発見する……それとも、恋人の部屋に忍びこむ……言葉と言葉の触れ

合いが小さなマジックショーの魅力を持っています。言語に潜んでいる二重性が思想の複雑な多岐性、多方面の発展への第一歩であると同時に、重なり合う血の暖かい二人の rendezvous—すなわち、エロスの世界—を示唆します。だから、掛け詞が恋のうたに出て来ると、訳者が、「あゝ又むずかしいのが出て来たな」と嘆くのではなくて、喜ぶことが本当です。チャンスです。セックスゲームが人間の快樂の一つなら、言葉のふざけも同じように訳者に独特の満足感を与えて呉れる筈です。男性的フビリス（傲慢、自信のありすぎること）が少し覗いている「古事記」の歌謡の

Uruwashī to

That beauty so fine,

Sane shi saneteba

If I can bed her, just bed her,

Karikomo no

Like sickled rushes

Midareba midare

Let the tangle tangle then,

Sane shi saneteba

If I can bed her, just bed her.

が単なる繰り返してその効果を成しとげています。一目見て、同じような思いを表す「古今集」の壬生忠岑のうたもあります。しかし、今度は「序詞」の方法を利用して、うたの真中の繋ぎ目で同音異義の繰り返しが、自然のイメージから人

間の局面への切り換えを行っています。第三句の「ねぬなは」(ジュンサイのこと)が第四句の「寝ぬ名は」(貴女と共に寝ていない噂)になってしまいます。植物の「ねぬなは」が「ねぬ」(寝ない)と「なは」(縄=rope)に分けることも出来、それに「ね」を“root”と解釈すれば、翻訳の言葉のあやの繋ぎ方が直ぐ浮かんで来ます。アリタレーションをちょこちょこ入れると、ほら、訳が出来上がっています。運よく、英語の“rootless”が日本語の「根もない」と同じく、「その証拠がない」という意味を持っています。それで、原文と訳文がこうならんで来ます。

KKSXIX: 1036

Kakurenu no

In hidden marshes

Shita yori ouru

Bedded under water grows

Nenunawa no

The slumbrous roperoot:

Nenu na wa tateji

Rootless must the rumor be

Kuru na itoi so

That I've never bedded you.

このうたの訳の場合も、「古事記」の歌謡の訳の場合も、英語の“bed”が動詞になっています。“To bed”が相手をして共寝させるという意味です。植物の“bed”もあります。例えば、「花壇」を“flowerbed”と云います。このように、両言語のおもしろい

所を掴むと、何とかして、言葉遊び風の訳が出来るわけです。

春のうたにも言葉がダブッて来る場合があります。今度は繰り返し返しでなくて、兼用言、本当の掛け詞です。読人知らずの「古今集」のうたで、こういう例があります。

梓弓おしてはるさめ今日ふりぬ

あすさへ降らばわかなつみてむ (KKS I: 20)

「はる」は季節の「春」と「ひっぱる」の「張る」という二つの意味を持っています。「あづさ弓を張る」↓「春雨」と早変わりします。うたの仕掛けやからくりを説明することが出来ますが、訳自体が説明的になってはいけません。だといって、掛け詞を無視することも出来ません。からくりのうたがからくりによって生きています。では、どうしたらいいでしょうか。この場合も英語がたすけに来て呉れます。英語の「Spring」も二つの意味を持っています。「春」という季節と「弾」はずむというのがそれです。この場合に本当の英語の掛け詞が出来るわけです。

A catalpa bow

Bent and strung to *spring* rain

Falls at last today;

If it rains tomorrow too,

We'll be picking the young greens.

大してすばらしいうたではありませんが、チャレンジに応える満足感にいくらかの価値があるでしょう。

しかし、やっぱり、若菜を摘むより、別の手探りの相手が望ましい筈です。独り寝の床に余所になった相手を慕ううたが和歌の特有の境地の一つです。大伴家持の夢のうたの中に次の一首があります。

MYS IV: 744

Ime no ai wa

Meeting in a dream

Kurushikarikeri

Is a cruel way to meet:

Odorokite

For you wake,

Kakisaguredo mo

Suddenly groping, but nothing

Te ni mo fureneba

Is there for your hand to touch.

これは、掛け詞のない、からくりのないうたです。恋の苦しみをありのままに伝えています。名作の中の名作で、「万葉集」の愛読者が一人残らずよく知っているでしょう。しかし、もう一首の同じような心で、異なる方法を利用するローン

リイベッドのうたがあつて、これも僕の考えでは大変すぐれた作品で、それほど知られていないものです。「古今集」の恋歌の一つで、紀貫之の作です。序詞と掛け詞の修辭法を使って、うたの上句は

「手も触れで月日経にける白ま弓」

という書き出しです。永い間使っていない、手で触れていない弓の話です。下句の最初の言葉がそれに続きます。「おきふし」という弓道の専門語で、弓を起し、また伏せる意味を表しています。けれども、下句の全体を見ると、別の話です。

「起き臥し夜は いこそねられね」

起きては又寝て、起きては又寝て、一晩中ねられないという意味です。すなわち、「おきふし」は掛け詞です。これだけだったら、このうたがありふれた「無心」の序に基づいた、わりあい平凡な作になるかも知れませんが、上句の序詞の所をもう一度見ると、「はっ」とします。これが「無心」ではなく、立派な「有心」——意味のある——隠喩であることに気が付きます。「しらま弓」——皮を剥いだ白い木——がすなわち独り寝の男が女である恋人の面影に立つ裸の姿を想像するわけです。そして永い間手が触れていない物はその愛する女の体です。だからこそ寝られな

いのです。それに「よる」は「夜」(“night”)に「近くなる」の意味の「寄る」、「い」は「睡眠」に「矢を射る」の「射る」の意味を重ねていますから、家持の夢のうたと違って、技巧的に複雑です。しかし、僕の読んだ限りでは、これほどエロスの緊張感を表現したうたは外にありません。もう一度その原文を上げて、それに訳文を加えます。

KKS XII : 605

Te mo furede

Hands have not touched

Tsukihî henikeru

Months and days gone by, white

Shiramayumi

Spindle-tree bow:

Okifushi yoru wa

Drawn taut, I quiver in the night,

I koso nerarene

Rising, sinking, far from sleep.

第四行の“quiver”(震える)は訳者からのおまけです。もう一つの意味は「弓」と関係のある「箠^{えびち}」です。日本語でいう「縁語」という趣向を入れて見たわけです。実は、入れて見たわけではなく、訳する最中に自然に浮かんで来ました。翻訳は大体そういうものです。

趣向を凝らすチャレンジに応えることはいいのですが、僕の今までの経験で一番むずかしかった訳は別のものでした。人麿の挽歌の中でもっとも憐憫な、調子のためらいがちな、優しいものです。若い女性の死を悼むもので、その女性の命の脆さと共に彼女の痛ましい程の美しさをも表わさなければならぬ責任を感じました。責任を感じすぎて、永い間いわゆる「訳者障壁」を煩いました。最初の訳を或る利口な若い知人に見せると、彼は遠慮なくその足りない所を指摘して呉れました。よって、落胆して、自信を失って、障壁が益々厚い壁になってしまいました。とうとう諦めて、そのうただけ置いて、他のうたの訳を続けました。今ではどこがわるかったか覚えていませんが、兎に角、手を付けることが恐くて、いやでした。一年位経って、やっともう一度そのうたに直面しました。どこから適当な言葉が出て来て、翻訳が可能になりました。結果として、いゝかどうかはうたを好む人にお任せしますが、とにかく、和歌アンソロジーの第一巻に次のように出ています。先づ原文を上げます。

吉備の津の采女みまかの死みまかりし時、柿本朝臣人麿の作る歌一首并に短歌

Akiyama no
Shitaeru imo
Nayotake no
Tōyoru kora wa
5 Ikasama ni
Omoiore ka
Takunawa no
Nagaki inochi o
Tsuyu koso ba
10 Ashita ni okite
Yūbe ni wa
Kiyu to ie
Kiri koso ba
Yūbe ni tachite
15 Ashita ni wa
Usu to ie

Autumn mountain
Russet glowing maiden,
Slender bamboo
Softly bending, tender child:
What were her thoughts,
That now if comes to this?
Long life was there,
A rope of tough bark-fiber.
And yet they say
It is only dew that gathers
In the dawn
To dry at dusk;
And yet they say
It is only mist that rises
With the dusk
To fade at dawn.

Azusayumi
Oto kiku ware mo
Obo ni mishi
20 Koto kuyashiki o
Shikitaе no
Tamakura makite
Tsurugitachi
Mi ni soenekemu
25 Wakakusa no
Sono tsuma no ko wa
Sabushimi ka
Omoite nuramu
Kuyashimi ka
30 Omoikouramu
Toki narazu
Suginishi kora ga

Even I who hear of this
No more than echoes of the twanging bow,
Regret I looked at her
With the vague glance of one who passes by.
How much the more must he
Who as on finest barken cloth
Pillowed on her arm,
Who like a long, straight guardian, sword
Lay close by her side,
Her husband fresh as the new grass,
Lie in such longing
As comes in loneliness,
Lost in a yearning
Bitter with deep regret.
That this young girl
Who passed before her time

Asatsuyu no goto

Should, like the morning dew...

Yūgiri no goto

Should, like the evening mist...

Sasanami no

The girl from Tsu

Shigatsu no kora ga

In Shiga of the gently lapping waves—

Makariji no

I too am lonely

Kawase no michi o

To see the path she took away,

Mireba sabushi mo

Down by the river shallows.

Sora kazou

Vacantly musing,

Ôtsu no ko ga

To the girl from Ôtsu

Aishi hi ni

On the day she met me

Obo ni mishikaba

I gave but a distant, passing glance—

Ima zo kuyashiki

And now I know the meaning of regret.

亡くなっただうねめが入水自殺だった説は最初の反歌に基づいています。

さて、こういう風に詩歌の翻訳者には色々なチャレンジがあります。原文の作者にも似たいどみがあります。結局、目的として詩を作らなければ、意味のない仕事です。又は、意味のない遊び：遊びには意味があるでしょうか。ありすぎると、遊びでなくなってしまうかも知れません。少し遊びのうたに戻りましょう。

うたの遊びの一つは、出来る限りの物の名前を一首のうたに詠み込むことでこれは奈良時代以前からありました。長意吉鷹ながのおきまろという歌人がそのゲームに特に秀でていたらしい。例えば、酢、醬ひしほ、蒜ひる（にんにく）、鯛、水葱なぎ（みずあおい）という五つの食品を次のうたに詠み込みました。

MYS XVI: 3851

Hishio su ni

Don't show a fellow

Hiru tsukikatete

Who's begging for a nice sea bream

Tai negau

All fixed with bean paste,

Ware ni na mise so

With vinegar and pounded garlic,

Nagi no atsumono

Such a thing as water-leek soup!

古今集の時代になると、このようなあそびが「物の名」又は「物名歌」という現象を生みます。物名歌の場合は、「物」の名を別の言葉の中に隠すというのが目

的になっています。これは掛け詞に倣った考えと思われれます。しかし、出来上がったうたは必ずしもその「物」と関係がありません。無理でも、あった方が勿論おもしろい。実は、あまりにもひどい例もあります。僕もひどい訳へ誘われがちです。例えば、「拾遺集」には十二支の動物を詠み込んだ二首のうたがあります。その一つは、子、丑、寅、卯、辰、巳を次のように入れています。

一・夜・ね・て・う・し・と・ら・こ・そ・は・思・ひ・け・め
う・き・な・た・つ・み・ぞ・わ・び・し・か・り・け・る

解釈を試みると、これは一度だけの恋の女性相手が男性に恨みをぶちまける、しかし、やゝ自分の失敗にも苦笑いをもする、不平作だろうと思います。「私が共寝の相手としてひどく不満足だったらしいですね。あれからなんの連絡もなく、どうも捨てられた身としか思えないわ。本当に憂うつです。」何かこのような意味でしょう。しかし、これはまじめな恋歌ではありません。このうたのもう一つの顔は、恋とか、思いとか、そういうセンチな感情を馬鹿にして、ゲラゲラ笑っています。この動物園のようなうたは遊びの度が過ぎて、あらゆる上品さを捨て、滑稽の領域に入ってしまったいます。ジャズの言葉を借りると、「It goes to town.」それで、僕も「go to town」してみよう。

SIS VII: 429 Anon.

Hitoyo *nete*

Not so neat a night?

Ushi to ra koso wa

Bovine in bed, I was a flop,

Omoikeme

So it would seem;

Ukina tatsu mi zo

Tiger, you left me to drag on

Wabishikarikeru

The tale of my sibilate sin.

ここまで動物達を追ひ掛けましたが、せゝかくの卯もまだ掴んでいませんし、
巳がただ蛇の「しゅう」という声を示唆する"sibilate sin"にだけ現れています。あゝ
見ると鼠も逃げたではありませんか。では、もう一度…

One night a rattle—

Ah, the cat'll catch it soon;

But tiger pussy

(Such a harum-scarum hussy)

Caught a crawler too long to drag on.

今度は子、丑、寅、卯、辰、巳、皆揃っています。「寅」以外は訳のジャングル
の中で隠れん坊しています。よく探して下さい。

動物に関連して、一つの思い出話を皆さんと分け合つて、終わらせていただきます。大分前の事です、僕の生徒の一人で、和歌の翻訳をテーマに卒業論文を書いた学生がいました。Carl Kayという若者で、彼自身も詩を作っていて、和歌の翻訳に大変熱を上げていました。あの頃、Carl君とよく詩や翻訳のことをしゃべつて、彼からアメリカの現代詩について大分教わりました。意見と「アプローチ」の違うところが色々ありましたが、先生としてCarl君の詩歌に対する情熱を高く買つて、和歌の意味を正しく理解さえすれば、詩人としての彼の自由を尊重することにしました。従来^の訳について、若者独特のきびしさで彼が論じ、自分の訳も入れて、普通より面白い論文が出来ました。僕がCarl君の論文を読んで、一番印象が強かったのは、或る「万葉集」のうたの彼の訳でした。今でも、その印象がありありと頭に残っています。Carl君の翻訳の対象は、雪をめずらしがる良い短歌でしたが、この程度の短歌が「万葉集」に数え切れないほどあります。僕もそういううたを沢山訳したことがあります、Carl君の訳を読んで、この一首に限つて、手を付けることが出来なくなった現在です。次のうたです。

ぬばたまの今夜^{こよひ}の雪にいざぬれな

明けむ朝に消^けなば惜しけむ

MYS Ⅷ:1650 Oharida no Azumamaro

Nubatama no

Koyoi no yuki ni

Iza nurena

Akemu ashita ni

Kenaba oshikemu

散文の直訳で「今晚の雪に濡れましょう。明日の朝になって消えてしまつていたら残念なことです。」この訳に出ていない所は最初の「ぬばたまの」という枕詞です。そしてそれがCarl君の名訳のきつかけとなつたところです。「ぬばたまの」は暗い意味の「夜^よ」「夕べ」「こよい」等夜に係有るもの、そして「黒」「髪」等にかゝる形容辞です。「ぬばたま」は「桤扇」という花の実であつたと思われています。真黒い玉です。日本語ではこれ位の説明で充分ですが、英訳する場合そのイメージを生かす言葉を探さなければなりません。従来の方葉の訳（僕のも含めて）を見るとさまざまの英語が出ています。「Pitch-black,」「coal-black,」「bead-black,」「seed-black,」「jet-black」「jet-berry-black,」「black-as-a-berry,」「blackberry,」

等々、それにもう一つ。「桧扇」を調べたら、“blackberry lily”以外にも“a leopard flower”という定義が出ています。“A leopard flower”…… あゝ、訳者の目が光る。黒い闇の中の豹：特に黒豹。その「花」：……とんでもないイメージですが、そのとんでもないイメージのとんでもなさこそ、何か外にない誘惑の力を感じます。ですから、“Night, black as the berry of the leopard flower”とか、“black as leopard-flower fruit”とかいうような訳をよく見掛けます。僕もそういうのを作ったことがあります。しかし、Carl君のこのうたの訳はこの程度をはるかに越えて、「豹」を檻から逃がしてしまいました。先輩達の訳を諷刺する意図もあったかどうか分かりませんがとにかくイメージを自由にして、小さなうたを爆発させて、自分の詩を作りました。熱狂の調子での、自由奔放な、学生詩人の遊び声です。「豹」が「雪」に跳び下りて、走り回り、「ぬばたまの」の黒さが石炭の“anthracite”(無煙炭)に生まれ変わり、“anthracite night”という形になります。では、先づもう一度原文を、それからCarl君の訳を読ませていただきます。

Nubatama no

Koyoi no yuki ni

Iza nurena

Kenaba oshikemu

Snow!

lets you and I go play in the snow

anthracite night anthracite night in the anthracite night like leopards

and landing

[illegible]

wooooooooooooooooooooooooooooohaaaaaaaaaaaaaaa

are you nice and wet

I'm nice and wet

翻訳論は色々ありますが、Carl君の「訳」は如何でしょうか。これも翻訳の範囲に入るでしょうか。それについて意見がそれぞれあるだろうと予想されます。結局「翻訳」とは何か。僕としては、単語の定義にこだわりたいくないのです。Carl君の卒業論文はこういうものばかりではなかったのですが、一番印象に残ったのはやはりこれです。夜おそく論文を読んでいた時の疲れが吹き飛ばされた瞬間をよく覚えています。Carl君のエネルギーに感電して、居眠りから目が覚まされました。僕もその瞬間に喜びの声を発したと思います。上代のうたの「ぬばたま」の種も永い眠りから甦って、現在において妙なる花を咲かせ、驚きと共に詩歌に潜んでいる根強い生命力について考えさせてくれました。

略語:

K = Kojiki 古事記

KKRJ = Kokinwakarokujō 古今和歌六帖

KKS = Kokinwakashū 古今和歌集

MYS = Man'yōshū 万葉集

SIS = Shuiwakashū 拾遺和歌集

SKKS = Shinkokinwakashū 新古今和歌集

あらゆる場合に「新編国歌大観」の
新番号を使いました。

註:

- ① Philip E. Cranston, *Before Time* (Varanasi, India: Vishwavidyalaya Prakashan, 1979), p.18.

原文は次の通りである。

Cithara crinitus Iopas

personat aurata, docuit quem maximus Atlas.

Hic canit errantem lunam, solisque labores,

unde hominum genus et pecudes, unde imber et ignes,

Arcturum, pluviasque Hyadas, geminosque Triones,

quid tantum Oceano properent se tingere soles

hiberni, vel quae tardis mora noctibus obstet.

Vergil: *Aeneidos*, I, 740-6

② ダンテの原文と兄の訳は次の通りです。

"Siede la terra dove nata fui

sulla marina dove il Po discende

per aver pace co' seguaci sui.

Amor, che al cor gentil ratto s'apprende,

prese costui della bella persona

che mi fu tolta, e il modo ancor m'offende.

Amor, che a nullo amato amar perdona,

mi prese del costui piacer sì forte,

che come vedi, ancor non mi abbandona.

Amor, condusse noi ad una morte:

Caino attende chi vita ci spense."

Queste parole da lor ci fur pòrte.

Da che io intesi quelle anime offense,

chinaì 'l viso, e tanto il tenni basso,

finchè 'l poeta mi disse: "Che pense?"

Quando risposi, cominciai: "O lasso,

quanti dolci pensier, quanto disio

menò costoro al doloroso passo!"

Poi mi rivolsi a loro, e parlà 'io,

e cominciai: "Francesca, i tuoi martiri
al lagrimar mi fanno tristo e pio.
Ma dimmi: al tempo de' dolci sospiri,
a che e come concedette amore,
che conosceste i dubbiosi desiri?"
Ed ella a me: "Nessun maggior dolore,
che ricordarsi del tempo felice
nella miseria; e ciò sa il tuo dottore.
Ma se a conoscer la prima radice
del nostro amor tu hai cotanto affetto,
farò come colui che piange e dice.
Noi leggevamo un giorno per diletto
di Lancelotto, come amor lo strinse:
soli eravamo e senza alcun sospetto.
Per più fiate gli ochhi ci sospinse
quella lettura, e scolorocci il viso:
ma solo un punto fu quel che ci vinse.
Quando leggemmo il disiato riso
esser baciato da cotanto amante,
questi, che mai da me non fia diviso,

La bocca mi baciò tutto tremante:
Galeotto fu il libro e chi lo scrisse:
quel giorno più non vi leggemmo avante."
Mentre che l'uno spirto questo disse,
l'altro piangeva sì, che di pietade
io venni meno sì com' io morisse;
e caddi, come corpo morto cade.

Dante: *Inferno*, V, 97-142

FRANCESCA DA RIMINI

"The land where I was born is set afar
Upon the shore to which the Po descends
In search of peace with many a follower.
Love, who, to love, the gentle heart soon bends,
Seized him for my fair body, which that day
Was torn from me: the manner yet offends.
Love, who, from loving, none beloved will stay,
Seized me for pleasure in him; held so fast
That, as you see, it yet goes not away.
Love led us to a single death at last.

But him who killed us Caïna waits for now."
These words were borne to us as from the past.
And listening to these tortured souls, my brow
I bent to earth, and long I held it thus.
At last the poet said: "What thinkest thou?"
And I replied, beginning so: "Alas!
What gentle thoughts, what soft desires have led
These two souls to so dolorous a pass!"
Then turned I towards them, and I spoke, and said:
"Francesca, thy strange martyrdom
Even to tears has made me still and sad.
But when the time of those sweet sighs had come,
O tell me, by what sign did Love dispose
That you perceive your longing and succumb?"
And she to me: "The greatest of all woes
Is to remember those our happy days
In time of sorrow: that thy master knows.
But if learn our love's first root so preys
Upon thy mind and draws thee in this measure,
I can but do as he who weeps and says.

We two were reading one day for our pleasure
Of Lancelot, how Love had bound him fast;
Alone we were, and harmless seemed our leisure.
But many times our eyes together cast
That reading, and discolored grew our face;
But one point only vanquished us at last.
For when we read the longed-for smile of grace
Taken and kissed by such a noble lover,
He, whom from me no power may displace,
Kissed me upon the mouth, trembling all over.
A Gallehaut the book and he who made!
That day no further word would we discover."
And while one spirit this sad story said,
The other wept so, that in pity's thralls
I fainted utterly, as I were dead,
And fell down, as a dead body falls.

1948 ·

(Translated from Dante, *Inferno*, V ~ 97-142)

by Philip E. Cranston, *Before Time*, pp.46-7.

③ 最近、この訳が僕のもとに戻りました。ながいあいだ迷子になっていた訳は兄のおかげで彼のフランス文学の学生達に代々読まれていたらしい。それを知った僕は吃驚仰天。

Villon: THE BALLADE OF THE HANGED

O brothers, you who live though we are dead,
Let not your hearts be hardened 'gainst our fate,
But pity us poor fools, and it will stead
You well that day you beg God's mercy great.
You see us strung, six felons, mate by mate;
As for our flesh we kept in pleasant state,
'Tis rot and rag now, and our guts inflate,
And we, the bones, shall turn to dust, earth's leaven.
You men that look, laugh not, but think 'tis late,
And pray that God will bring us all to Heaven.

If we call you our brothers, it is said
Not to call up a sneer. Our crimes were great,
And just our punishment; yet think what led
To this: unstable minds, most human trait.

Commend us, for that now we are unmade,
To blessed Mary's son, who holds our fate,
That his redemption be not turned to hate
But yet may save our souls from Hell's hot levin.
We're dead, let no-one make us sport or bait,
But pray that God may bring us all to Heaven.

The rain has washed us till our color's shed,
And the sun has dried us like a shriveled date;
Crows did eat our eyes out from our head
And tore off beard and brows, and were not sate.
Never do we have rest, nor hang dead weight,
But wind-worn, to and fro are swung and swayed
At the wind's pleasure, pleasure never stayed;
More pitted we than thimbles, pecked and carven.
Join not our sorry brotherhood, we plead,
But pray that God may bring us all to Heaven.

Prince Jesus, master thou of all things made,
Keep us from Hell-grasp, we that are afraid:

We want not Hell, nor valiant man nor craven.
Let not one mocking smile be here displayed,
But pray that God may bring us all to Heaven.

(Translated by Edwin Cranston©)

- ④ うゑの謡の聲の田舎さ Arthur Waley, trans., *Japanese Poetry: The 'Uta'*, Oxford, Clarendon Press, 1919 245-246 p. 246.
- ⑤ Douglas R. Hofstadter, *Le Ton beau de Marot: In Praise of the Music of Language*, New York, Basic Books, 1997.

発表を終えて

日本詩歌の歴史には社交的な面が非常に強い。特に和歌、連歌の場合、「歌合せ」もあり、「座の文学」も発達して来ます。現代短歌、俳句の世界に於ても、歌人、俳人が流派毎に分かれており、その流派の中で集いを持ち、お互いに触れ合い、活動しています。現代詩の世界にも同じ現象があるような印象を受けます。詩人が一緒になって詩的生活の可能性を発見し、その味を味わいます。

社交性に欠けている自分のような人間は、この「共同的」芸術の世界の一員としては不適當であって、むしろそれを逃れようとします。静かな、秘密の場所に籠って余所見をしながら、詩（あるいは翻訳）を作るのです。この逃亡者の「連歌」は飽くまでも独吟です。

しかし、いくら逃亡者であっても、人間関係が必要です。いつか自分の声、自分の作ったものを他の人間に伝えたいとなります。「発表を終えて」の私の本当の気持ちは、その舞台を与えて下さった方々に対する感謝です。特に司会者の篠原さん、コメンテーターの早川先生に厚く御礼申し上げます。又、延々と続いた私の話を忍耐強く聞いて呉れた聴衆の皆さんにも同じく謝意を表したいと思います。そして、一言を付け加えれば、この一年間、日文研で自分の研究に専念させてもらった有難さも……。

Edwin R. Cranston

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊びー拳を中心にー」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシュ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考ー『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐる－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴェン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 -井上靖文学における『陰謀』-
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウオ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦4	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦7	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦8	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧0	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前期に來日した中国人の外交官たちと日本」
⑨①	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨②	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨⑤	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 準教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
⑨⑥	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨⑦	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学ー近代からの再生ー」
⑨9	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何かー21世紀に向かって」
⑩1	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人ー外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼までー狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バッサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか — 詩的イメージとしての典故 —」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日 文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪11	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 『『愛玩』－安岡章太郎の『戦後』のはじまり』
⑪12	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 『『道行き』と日本文化－芸能を中心に』
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Grenn HOOK 『地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割』
⑪14	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 『『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ』
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 『日本の民主主義－沖縄からの挑戦』
⑪16	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 『うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?』
⑪17	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 『石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について』

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサル タント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴 力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮通信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (国立高等研究院国民大学校文化大学学長・日文研客員 教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」

○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデータベースで見ることが出来ます。

発行日 2000年3月1日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp/>

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

© 2000 国際日本文化研究センター

■ 日時

1999年 3 月16日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

